

山のパンセ

串田孫一

*山のパンセ 串田孫一

定価一五〇〇円□昭和四十七年二月二十日初版第一刷発行□昭和五十一年五月一日初版第五刷発行□発行者増田義和□印刷所大日本印刷株式会社 株式会社東京研文社□発行所實業之日本社 東京都中央区銀座一—三—九電話東京五六二—四三一—振替東京一—三二六□(全一冊版)□

© MAGOICHI KUSHIDA 1972

0095-320041-3214

山の
パン
セ
目次

I

山での行為と思考	ふたりの山	ひとりの山	雪のマチガ沢	雪の森の一夜	山のソナチネ	仙水峠から栗沢山	富士山	雪のある谷間	歌と死	霧の彼方	夏草の匂う日	旅人の悦び	高原にひそむ詩	八ヶ岳の見える旅	高原の山小屋
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
12	18	22	28	31	38	42	47	53	57	64	74	78	83	88	93

II

幻影	残雪の頃	岩壁	雪を待つ草原	山小屋の書棚	私の山とスキー	冬山の旅	雪・氷・風	春の山	息子の山登り	山の地図	不安の夜	エーデルワイス	スウイスの山	山の夜風
⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮ ⋮ ⋮
154	149	142		102	104	111	114	118	121	123	126	132	134	137

前穂高	穂高	霧と日光の鬼ごっこ	雲の多い麓の旅	初夏の上河内	島々谷の朝	島々谷の夜	山賊のどてら	コロボックル・ヒュッテ	三月の山の思い出	山人の春	杉っ葉拾い	山小屋への挨拶	断想	峠・高原・風	意地の悪い山案内	牧場の光
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
240	233	229	226	220	216	208	204	201	197	194	188	182	177	173	167	159

III

岩の物語	岩の沈黙	朝の祈り	山の歌	告白	無難派	らしいスキー	旅	山の放送劇	仕事で登る山	山で食べることに	山の見える都市	つむじ曲りの山	霧島山	秋の訪れ
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
297	291	288	286	280	278	275	270	266	263	259	254	250	245	242

蒜山	378
早池峰山	371
白峰三山	365
山案内人	362
幼い日の山	354
私がもう一人……	352
怪物の出現	347
病める山	345
山の遊園地	339
崇拜と礼讃	331
山の革命	326
雨の山の夢	322
山を描く画家	319
山村の秋	314
伴奏	310
伝説の国	306
堆積	300

後記	断想	幻想	疲れと悦び	山の湯	雪の谷あるき	水	山と少年	夏草の中の群像	晩秋の山の色	富士山の植物	粟島
----	----	----	-------	-----	--------	---	------	---------	--------	--------	----

⋮ 446	⋮ 424	⋮ 417	⋮ 413	⋮ 409	⋮ 407	⋮ 403	⋮ 401	⋮ 400	⋮ 398	⋮ 395	⋮ 392
----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------

I

山での行為と思考

今年は二月になってから続けざまに山へ出かけました。四日五日、ある時は二週間近くも雪の山へ入っていました。どうしてまた急に、そんな山ばかりへ行くようになったのかと言つて首を傾ける者もいますけれども、私は別に、自分のことを不思議に思つてはいません。二年ほど前に久し振りに雪の山へ登ったときには、寒さにもこたえましたし、膝も昔のように動いてくれませんでした。自分でも歳を考へて、まあ止むを得ないことだと思ひました。それよりも、もう眺めることも出来ないと思つていた岩峰やかたい氷や、無数の針のかたまりのような風に再びめぐり会えたことを悦びました。

しかし、それから、体力に不安を抱きながらも、懐しい山々を訪れるたびに、脚や呼吸にも、少しずつ自信をとり戻し、時々には負けない氣持や強情を張つてみることも出来るようになりました。しかも面をしながらも心たのしく霧や雨の中を歩き、氷の富士の、非情の烈風にもまけずに、山頂に辿れたことを、実は秘かによろこんでいるのです。

ところで、さて私は困ってしまいました。山の中で、私は何を考えているのかと訊ねる人があるのです。それは何故山へ登るのかと質問された時と同様に、あるいはその時以上にすらりとはお答え出来ません。私はつい最近も山から帰って来たのですが、その山で、また過去に登った幾つもの山で一体どんなことを考えていたか、正直に言ってみて覚えてはいません。そうかと言って、山へ行くと何も考えなくなるという訳でもないのです、それで困ってしまいました。

山では自分の行為の質が変るように、思考の質も変るのでしょうか。

*

どうも私は、街を歩いている時の方が、余計に何かを考えているような気がします。どっちみち私のことです。切れ切れのまとまりのないことでしょうか、山の中では、それさえも殆んどしないで、苦しければ苦しいように大きな息をし、それを我慢し、一步一步踏み出していると思われません。富士の山頂に近い氷の斜面では、五十歩登ってはビッケルに倚りかかって一息入れることを繰り返していました。

そして帰って来てから、手帳に鉛筆や万年筆で乱雑に書いたことを、自分でも、判読出来なくなってしまううちに整理をします。普段の日記帳には書かずに、山日記の方へ絵なども入れて書くのがたのしみです。それをしながらいろいろのことを想い出します。樹林帯を夜登っている時に、木々の梢が触れ合って、不思議な音を立て、私の足をとめたことだの、雪庇が落ちそうになっていた稜線から、何度も何度も小規模な旋風が起って、それが百メートルほど雪の急斜面を下ってくると、そこらあたり

に埋れ残っている岳樺をさわがせては、消えてしまったこと、啄木鳥の造った木の幹の穴が大きかったこと、手先がどうにも冷たくて、いよいよ凍傷にかかるのかと思ったこと、まずそんな種類のことならば、幾らでも細かに想い出すことは出来ます。けれどもその時々、私は一体何を考えていたか、ちっとも浮んでは来ません。

*

人間のうちに、靜的な叡智人ホモ・サピエンスと、動的な工人ホモ・ファベルの區別をした人がいます。ごぞんじでしょうか。

私は昔、そのことを教えられた時、山を歩く人間は行動的な人間に属するらしいことを知って、すっかり考え込みました。考え込んでも私の頭は單純にしか動いてくれなかったために、それ以来ホモ・サピエンスの方に何ということもなく懂れるようになりました。

懂れたところで、そのとおりになるわけありませんけれど、重たい荷物を背負って山を歩き廻っていては、いよいよ單純になり、いよいよ愚かになるばかりのように思われ、それよりも、部屋に閉じこもっていても考える人になりたいという願いを強く持ちつつ、それが既に賢明な決意だったように山から離れました。

*

これは今でも根本的には訂正する必要のない考え方だと思っています。天候に注意すると、雪崩

に気を配るとか、その程度のことは当然ですけど、多くの場合、ただ頑固に意地を張って足を動かしていれば、いつかは山頂に立つことが出来ます。そして何と言ってもそれが山登りの一番大きな要素です。疲れて、そのまま登る意欲を失ってしまえば、そこにどんな理由があろうと、山での行為は大体終ってしまうことになります。

ただ倒れて動けなくなってしまうまでに疲れ切めることは非常に愚かなことで、少しも立派ではありませんし、明らかに敗北です。

ところが、山での行為と思考とが一つになる場合があります。私は、秘かにそういう機会に巡りあうことを願って山へ出かけているような気さえして来ました。つまりそれは、さまざまな困難にぶつかった時です。そしてあっさり引きさがらずに、その困難を乗り越えようとする時です。引きかえさなければならぬ時も勿論あります。それを考えずに進むことは、もう勇気でも何でも無い、ただの無謀にすぎず、正しい判断の結果として引きかえすことを決意することもよくあります。

しかし、自分の前に、両手をひろげて立ちふさがるような困難が、それを充分に検討したあげく、充分に乗り切れる自信がこちらに湧いて来た時、どれほど胸をさわがせ、高鳴らせるものか、想像していただくことが出来るでしょうか。

私はもう若くはありません。嘗て持っていた筈の力をいつの間にか失ってしまいました。そのために、段々と下らない用心深さを否応なしに持つようになってしまいました。そしてもっとと齒痒いことは、しばしば、山の中にいながら樂をしようと思うことです。そういうよくない根性を払いのけるために、また余計な力を使わなければならなかったのが実に情ないのです。